



～文化の風が吹くまち ちくしの～

文化薫道



◆其の九十一 器へのあこがれ

～メイドインチャイナ～

中世の日本人は、中国製の器にあこがれをもっていました。中国製の磁器は薄さ、光沢、焼き方などの技術どれ一つとっても、当時の日本では製作、製造できないものだったのです。日本人は貿易をすることで、中国製の器を手に入れるようになります。

大陸から近く、貿易の拠点になっていた博多周辺での発掘調査では、中国製の陶磁器が大量に出土しました。また、韓国南西部の新安(しんあん)沖では、中国から博多に向かっていた貿易船が沈んでおり、積み荷の中に2万8千点もの陶磁器が見つかっています。このように日本人は中国製の器を強く求めていました。

経済の拠点である博多と政治の拠点である大宰府のどちらも近い「ちくしの」でも、発掘調査で中国製の青磁や白磁の器が見つかっています。中村遺跡(大字原)や牛

島宮崎遺跡(大字牛島)では、中世の墓から完形品の青磁碗(わん)が出土しています。傷や欠けがないことから、生前の持ち主が大切にしていたものと思われます。長く土中に埋まっていたにもかかわらず、深みのある緑色(青色)と光沢のある肌合いは、思わず見とれるような美しさで、あの世まで持っていきたかった気持ちもわかります。

中世の「ちくしの」人は、舶来(はくらい)の貴重品を入手しやすい立地を活かすことで、憧れのメイドインチャイナを手に入れることができたのではないのでしょうか。



閩文化財課

中世墓出土の青磁(中村遺跡)



筑紫野市フェイスブック

<https://www.facebook.com/ChikushinoCity/>



筑紫野市ツイッター

<https://twitter.com/ChikushinoCity/>



筑紫野市LINE公式アカウント

<https://lin.ee/6X9wMoy>